

指導資料



鹿児島県総合教育センター

図画工作 第34号

—小学校、盲・聾・養護学校対象—

平成18年 5月発行

児童の絵の見方と指導の工夫

図画工作の研修会等で、多くの先生方から「児童の絵をどのように見たらよいのか、また、どのように指導したらよいのか分からない。」といった声を聞く。

そこで、本稿では、各学年における『児童の絵の見方と指導の工夫』について述べる。

1 基本的な立場

児童は、自分の思いや願いを絵に表したいという根源的な表現の欲求をもっている。この欲求を満足させ、絵に表すことの喜びを十分に味わわせることが、図画工作科としての重要なねらいである。

絵は本来、自分なりの見方や考え方、感じ方であらえたことを、想像力を働かせて膨らませながら、自分の思いのままに楽しく表すものである。したがって、指導に当たった教師は、児童が心を感じたことなどを思いのままに楽しく表現することができるように、一人一人の児童の心の動きを十分にとらえ、児童と一緒に楽しみ、共に創造していく姿勢をもつことが大切である。

その際、絵は成長していく児童の要求に合わせて指導・支援していくものであり、決して「かかせるもの」であってはならな

い。教師が児童の心をとらえられず、その要求に応じた適切な指導・支援ができないため、児童が絵に表すことへの意欲を失ってしまうことは問題である。

2 各学年における絵の見方と指導の工夫

絵の見方と指導の工夫に当たっては、児童の発達段階や実態、表現活動の特徴を踏まえるとともに、図画工作科の目標や内容に即して、表現能力や態度を培うことを重視することが大切である。

(1) 低学年の表現活動の特徴及び絵の見方と指導の工夫

低学年は、形や色を意識し始め、主観的な表現が拡大し、自由に表現することの喜びと楽しさを体感する時期であり、十分に認め、褒めることが大切である。

ア 表現活動の特徴

- 表現の結果にこだわらず、表現活動そのものを楽しむ。
- 興味や関心のあるものを誇張したり、大きく表現したりする。
- 画面に、羅列的にばらばらにかいていく場合が多い。
- 自分が概念としてもっている形や色

に置き換えて表現する。

- 自分の好きな形や色などを使う。
- 思い付いたことを、すぐ試そうとする。
- 始めに手掛けたことが変わっていく。
- 経験したことを、画面に説明するように表現する。
- 興味を示したものに集中し、他に対してはあまり関心をもたない。

イ 低学年の絵の見方



- ☐ 思いのままに楽しんでかいているか。
- ☐ 人のまねでなく、その子の視点でとらえているか。
- ☐ 子どもらしい素直な表現であるか。
- ☐ 画面がすっきりしており、伝えたいことがはっきりしているか。
- ☐ 無意味なぬり込みがなく、好きな色で伸び伸びとかいているか。

ウ 低学年の指導事例と指導の工夫

(ア) 題材名

「こんなことあったよ」(2時間)

(イ) 目標

心に残ったことを進んで見付け、クレヨンやパスなどを使い、思いのままに絵に表すことができる。

(ウ) 展開

心に残ったことを思い出し、絵に表したいことを考える。

- ・ 表現したい対象の動きや様子などを

よく思い出させたり、よく観察させたりする。

- ・ 動きや表情などを動作化させるなど、五感を使ってとらえさせる。
- ・ 興味を強くもつところやかきたい動機などについて話をさせる。

思いのままに絵に表す。

- ・ 児童の素直な思いや感じ方を見守り、その子らしい表し方でよいことを認める雰囲気づくりに心掛け、温かい励ましの言葉で指導する。
- ・ 一人一人の形や色などの感覚や関心を大切にし、素直に表現させる。
- ・ 自分を絵の中に入れると、生き生きとした絵になることに気付かせる。
- ・ かこうとするものにはいろいろな色があることに気付かせ、好きな色を選んでかかせるようにする。
- ・ クレヨン、パスなどを中心に、コンテ、各種のペン類、色鉛筆を、児童の欲求に応じて試したり組み合わせたりしながらかかせる。
- ・ 必要に応じ、水彩絵の具を使わせる。
- ・ 自由に伸び伸びとかかせる。
- ・ 無意味な色のぬり込みをさせない。

表現できた喜びを味わう。

- ・ 一人一人の表現のよさを認める。
- ・ 完成した絵を基にして話をさせる。

(2) 中学年の表現活動の特徴及び絵の見方と指導の工夫

中学年は、描写力が増すとともに、対象を見てかくことに興味を示し、ものとの関係に注意してかくなど、空間に対する意識が芽生える。絵を客観的に見ること

ができるようになるため、表現への意欲を失うことのないように留意する。

ア 中学年の表現活動の特徴

- 興味や関心をもつ対象が広がるとともに、一層想像力を働かせ、子どもらしさを発揮するようになる。
- 表したいことを見付け、表し方を工夫するなど、進んで取り組む姿が見られ、表現内容が豊かになる。
- 客観的な表現をするようになり、対象の見方や感じ方、表し方に違いが見られ、表現の仕方が多様になる。
- 計画的に表せるようになってくる。

イ 中学年の絵の見方



- 作者の思いが伝わってくるか。
- 自分のとらえ方や表し方でかいているか。
- 中心と周りのものとの関係を考えてかいているか。

- 思いに合った色をつくり出しているか。

ウ 中学年の指導事例と指導の工夫

(ア) 題材名「すきなところ」(4時間)

(イ) 目標

一番好きなところがよく表れるように、中心になるものと周りのものとの関係を考え、画面構成や彩色を工夫して絵に表すことができる。

(ウ) 展開

対象を見ながら、表し方を考える。

- ・ 表そうとする対象をいろいろな視点から観察させ、形の特徴や色、組合せ

↓ の面白さをとらえさせる。

対象をよく見て線描し、思いに合うように彩色する。

- ・ 自分なりに感じ取った形や色をつくり、素直にかかせる。
- ・ 思いを感動的に強調してかかせる。
- ・ 思いを表すための主要なものをしっかりかき、それを生かす周りのものの形や色、大きさ、位置などを検討してかかせる。
- ・ 画面が寂しいときはかき加えたり、にぎやか過ぎるときは省いたりするなど、構成を工夫させる。
- ・ 対象をよく見て、色の変化に気付かせる。
- ・ 水彩絵の具の基本的な扱い方について指導し、多様な扱い方を児童が見付け表現に生かせるようにする。
- ・ 思いに合わせて混色や重色、にじみなどの表現を工夫させる。
- ・ 無意味なぬり込みやべたぬりにならないように工夫させる。
- ・ 豊かな発想や構想、その子らしい感じ方や技能などの力を伸ばすように、共感的な支援をする。

お互いの絵の工夫のよさを話し合う。

- ・ その子の表し方のよさを十分認めるようにする。

(3) 高学年の表現活動の特徴及び絵の見方と指導の工夫

高学年になると、主題や自分らしさを意識したり、奥行きや広がりを考えて意図的に表現を構想したりできるようになる。また、写実的な傾向が見られ、見たままにかきたいという願いが強くなってくる。

ア 高学年の表現活動の特徴

- 個性的な表現が見られる一方で，作品を人に見せることに慎重になる。
- 表現したいことが，見たことから想像したことへ広がり，その広げ方や深め方には，その子らしさがはたらく。
- 観察力，思考力，判断力が増し，ものの見方，考え方も深まる。
- 客観的なものを求めていく傾向が強くなり，細かな点まで観察できる。
- 表現技術が一層高まってくる。

イ 高学年の絵の見方



- ☐ 主題が明確で，画面構成が工夫されているか。
- ☐ 奥行きや広がりを感じさせるか。
- ☐ 内容が豊かでよく見てかいているか。
- ☐ 色の変化をとらえて表現しているか。

ウ 高学年の指導事例と指導の工夫

(ア) 題材名「心に残る風景」(全6時間)

(イ) 目標

心に強く残った様子を奥行きや広がりなどを考え，画面構成や彩色を工夫して絵に表すことができる。

(ウ) 展開

表したい場所を見付け，よりよく表すための工夫を考える。

- ・ 自分の見方や感じ方で，対象の美しさや不思議さなどを感じ取らせる。

- ・ 表したい感じを出すために，対象をとらえる視点や主と従，遠近（近景，中景，遠景）などに気付かせる。
- ・ 思いがよく表れるように，対象のどの部分を画面のどこに，どのように表現するか構想を練らせる。

自分の思いを工夫して絵に表す。

- ・ 表したいことや表したい感じを大切にし，いろいろと試みさせる中で自分の思いに合った表現を見付けさせる。
- ・ その子らしい試みや表し方を励ますようにし，個性的で創造的な表現の能力を高めるようにする。
- ・ 奥行きや広がり，省略や強調など表現の工夫をさせる。
- ・ 色の変化を見取り，質感や色の明暗が出るようにタッチや色の濃淡，混色，重色など工夫させる。
- ・ 画用紙や線描材など，自分の思いに合わせて選べるようにする。

お互いの作品を鑑賞する。

- ・ よさや美しさをとらえさせる。

児童の絵の見方と指導に当たっては，教師は児童の発達段階や表現活動の特徴を踏まえ，児童一人一人の心の動きをとらえる必要がある。教師自身が，児童と共に絵に表現することを楽しむことで，児童は絵に表現することへの意欲を高め，自ら表現を工夫できるようになる。まず，児童と共に創造することを心掛けてほしい。

【参考文献】文部省『小学校学校学習指導要領解説 図画工作編』平成11年（教科教育研修課）